

書 評

●松野 正紀(東北厚生年金病院院長)

IPMN/MCN 国際診療ガイドライン

日本語版・解説



執筆：国際膵臓学会ワーキング
グループ

翻訳・解説：田中 雅夫

B5 頁 84 2006 年
定価 4,830 円(本体 4,600 円 + 税 5%)
[ISBN 4-260-00232-5]医学書院刊

癌研究会附属病院の大橋計彦らが、十二指腸乳頭の特異な所見を伴った粘液産生膵腫瘍を、世界に先駆けて報告してからはや四半世紀が経過した。この間、数多くの報告がわが国および諸外国からなされ、この疾患が膵臓病のなかで重要な位置を占めるようになった。なぜ重要なのかというと、発生頻度はそれほど高くないが、経過とともにがん化する傾向が強いからである。

わが国の高齢者の剖検膵では、半数以上に微小なものも含めて嚢胞性病変が認められる。このような状況のなかで、嚢胞性疾患の鑑別診断が治療上重要になってきた。世界保健機関(WHO)が、粘液を産生する嚢胞性膵腫瘍を膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)と粘液性嚢胞腫瘍(MCN)の2群に分類したのが10年前であった。それ以後、本疾患に対する理解が急速に深まった。

2004年に第11回国際膵臓学会が仙台で開催された際、「IPMN/MCNの診療ガイドライン」のシンポジウムがもたれた。最初にわが国から発信され、その病態解明についてはわが国が世界をリードしている本疾患のガイドライン作成の討議が

日本で行われたのは極めて当然のことであった。

シンポジウムの司会と意見の取りまとめ役を担当したのが本書の訳・解説者の田中雅夫教授であった。それは世界各国の第一人者を集めてのコンセンサスミーティングとなった。その時の国際膵臓学会の成功はひとえに「国際診療ガイドライン」のシンポジウムの充実によるところが大きく、田中雅夫教授の事前の意見調整のすばらしい手腕と見事な司会振りは今でも語り草になっている。その後、広く国際的合意を得て英文で学会誌『Pancreatology』に掲載されたものが「International Consensus Guidelines for Management of Intraductal Papillary Mucinous Neoplasms and Mucinous Cystic Neoplasms of the Pancreas」である。本書はその日本語版解説書である。

診断と外科治療のキーポイントを示す。

消化器病の診療でしばしば遭遇する嚢胞性膵疾患では、鑑別診断と切除が必要かどうか、切除範囲はどこまでかの判断に多くの医師が悩まされる。英文のガイドラインを読みやすく翻訳するとともに、ガイドラインで使用できなかった画像を随所に挿入しながら、診療のポイントをわかりやすく解説しているのが本書の特徴である。新たに挿入された病理組織像や画像は、多数のなかから厳選された典型的なもので、それだけでも一見の価値がある。本邦で最も多くのIPMN/MCN症例を経験している著者の解説だけに説得力がある。

膵疾患を専門とする医師だけでなく、広く消化器病の診療に携わる方々に本書の一読をお勧めしたい。